MAPLE NEWS

2009年 Vol.63

飯島拓也

…ダブル・スクールを実践中…

Takuya Iijima

ニュージーランドの
公立高校に通学しながら
日本の通信制高等学校でも勉強中!!

フレンドリーな現地の人に支えられて、自信が生まれた。

中学校には、通ってはいましたが、無気力な日々を送っていました。これが原因、というほどのことはなかったんですが、まず授業がすごくいやで、自分なりに必死で勉強したんですが、もともとちゃんとやっていなかったので成績はどんどん落ちてしまいました。仲のいい友だちもいたんですが、ちょっかい出してくる連中もいたりして、一言で言うと、何もかもうざかった。そんな僕の様子を心配した母がカナディアン・アカデミーという留学専門機関を訪ねて相談したのが始まりでした。

留学先はニュージーランドに決まりました。最初は3カ月の短期留学だったので、気軽に「行ってみようかな」という感じでした。行ってみたら、ホームステイ先の方々も、学校の先生やクラスメイトも、街の人も、出会う人みんながフレンドリーで、良いところだなと感じました。だから、そのまま残って、地元の中学校に編入するという道を選びました。

学校では、もちろん最初は言葉がまったくわからず、戸惑うことばかりだったのですが、クラスメイトがいつも僕が困っていないか気にかけてくれて、教えてくれるのでとてもありがたかったです。小さい頃から水泳をやっていたので、泳ぐのは得意だったのですが、地区の大会に出場したら優勝できたんです。そのときは大騒ぎで、みんなが自分のことみたいに喜んでくれました。その頃から自信みたいなものが少しずつついてきて、勉強もがんばろう、と思うようになってきました。

―― 中面へ続く ――

ENGLISH JAPANESE STUDIES
CANADIAN ACADEMY SETAGAYA
2-2-15 SHINMACHI SETAGAYA-KU, TOKYO, 154-0014, JAPAN TEL FAX 03-3428-2444
BRANCH:KOKUBUNJI,ENGLAND

Michi recommends
響く本『人生について』

母から、事あらためて「教え」を受けたといった記憶はまったくない。何か質問しても、答えてもらった記憶はない。返事は、たいてい「学校の先生にお聞きなさい」か「教会の先生にお聞きなさい」である。いわば質問の種類によって、これを二つに分けるぐらいのことしかしなかった。この点でもクリスチャンの家庭は便利である。もっとも「教会の先生」といっても、牧師ではなく日曜学校の教師である。それはたいてい、YMCAに属する大学生か神学生、ちょうど兄貴分に当たっていたから、質問しやすく何でも聞けた。いわば、「まじめな兄のかわり」といったところである。

母は子どもたちを信じ切っていた。これは、いま思い出すと少々不思議な感じがする。後年、長姉がこれを思い出して、「あれくらい信じ切ってしまわれると、嘘もつけないし、グレるわけにもいかないわね」と言っていたが、自分が子どもを持つと、余計にそれを感じるらしい。

たとえ何か問題を起こしても、それについてのこちらの言葉を百パーセント信頼し、根掘り葉掘り探り出そうとしたり、詰問調で質問をしてくることは絶対になかったから、一通りの報告で終わってしまった。

結局みな、常に両親を見ているから、不知不識のうちに、その影響を受けていくのであろう。その一つが、私たちは両親の夫婦喧嘩というものを一度も見たことがなかったので、兄弟喧嘩というものがなかったことである。親戚などが来て「不思議ねえ、あなたたち喧嘩したことないの、兄弟喧嘩って知らないの」と言われたことがあるが、これはおそらく両親に夫婦喧嘩がなく、そのために、家の中に喧嘩があるという状態が想像できなかったからであろうと思う。また両親とも、子どもに暴力を振るったことは一度もなかった。

さらに子どもたちの父親批判は絶対に許さなかった。といっても別に叱るわけでなく、静かに反論して子どもの批判を封じてしまった。生意気盛りの中学生のころ、私が「お父さんも結局、大した事業はできず、小企業の経営者でおわりか」といった意味のことを口にしたことがある。「そうではありません。一人で東京に出て来て、小さな事業を経営しているだけでなく、子ども四人を育てあげた。これは大変な事業なんですよ」と言い、こちらの口を封じてしまった。何しろ、自分が育て上げられた一人だから何も言えない。

こんな調子だったので、子どもや他人の前で、平気で自分の夫を批判する他家の奥さんが、われわれには異常に見えた。姉が夏に遠縁の家に呼ばれてしばらく過ごしたが、帰って来て不思議そうな顔をして言った。「へんよネェー、あの家。あの小母さんたら、明けても暮れても『うちのお父さん、働きがないから』って口癖のように言うのよ」と言っていたが、これは、わが家では考えられないことであった。

こういう言葉は結局、子どもの前で自らを貶めているに過ぎない。母は絶対にそれをしなかった。

と言っても、父の生き方には相当に批判的であったのではないかと、私は思っている。ただそれを話すなら、その必要がある場合に限るということだったのであろう。私が出版をはじめようというとき、父の経営の長所・短所と思われることを相当に詳しく話してくれた。しかしその種の指摘を父にしたとは思えない。それは先生の注意を私に告げなかったと同じことで、本人が自分で改める気にならなければ無理だと思っていたのであろう。

山本七平
（やまもと・しちへい）

1921年（大正10）、東京に生まれる。
1942年（昭和17）、青山学院高等商業学部を卒業。
1958年（昭和33）、山本書店を創立。
山本書店として主に聖書関係の出版物の刊行を続けるからわら、評論家としても活動。
1991年（平成3）永眠。
〈著書〉
『私の中の日本軍〈上・下〉』『「空気」の研究』（文藝春秋）『「あたりまえ」の研究』『存亡の条件』（ダイヤモンド社）、『常識の研究』『「常識」の落とし穴』（日本経済新聞社）、『日本資本主義の精神』（光文社、『論語の読み方』『昭和天皇の研究』（祥伝社）、『勤勉の哲学』『日本的革命の哲学』『日本人とは何か。〈上・下〉』『静かなる細き声』『日本人とアメリカ人』（PHP研究所）など。

父親批判を許さぬ家。
批判は必要ある場合に限る。

My name is it.

私は誰でしょう？

ヒント　1、カナディアン・アカデミー・セタガヤの元生徒。
2、中学から大学院までイギリスに留学した女子。
3、宇宙飛行士の夢を持つ女子。

日本の管理教育に反発する個性派を相手に、海外留学を軸にした「転地教育」は続行中だが、世界はIT時代に突入し、ボーダレスとスピード、それに時差が無くなった時代の到来を感じさせる日常である。

小粒なのに重みがある。小柄な体に似ず物事に動じない大陸的な重みを感じさせる女の子。カナディアン・アカデミー・セタガヤに通い始めた保育園の頃は、近くに住んでいたが、その後、祖父母との三世代家族になり、片道一時間半を掛けて英語の勉強を続けた女の子。

夏休みはイギリスの寄宿舎生活を繰り返すうちに、自然に留学を考えるようになった。当初は祖父の資金的な援助もあったが、それも祖父の急死でストップ。

家族会議で、母親一人で留学を続けさせる事は、不可能だと皆が口を揃えて反対した。

しかし母親は娘が高校を終了するまで、本職の仕事の他に二つのパートを繋ぎ、更にロンドン大学、大学院の進む頃は、授業料だけの仕送りで娘はアルバイトで生活費を賄った。

その母親が最近、社会人になった娘とロンドンで再会し、娘の仕事場である大手銀行・HSBCの災害モデル分析再保険部を訪問した時のエピソード。

「Hello It」、「How are you It」あちこちから娘に声が掛かる。「何故名前で呼ばずに、Itと呼ぶの？」と訝しげに尋ねる母親に、「I don't know but 仲間は私が女でも男でもない、中性だと言ってItで呼ぶの」と娘が答えた。

「21世紀の日本の子供はユニ・セックスと国際化の荒波の中に投げ込まれる」。

20年前、留学部を立ち上げて以来、このシミレーションの実践を続けているが、その第一号の女の子にイギリス人が付けたItのニック・ネームに乾杯。

My name is 道方望都。